

# 養賢寺の堂宇

清田義雄

(事務局長・佐伯市東町)

一三九号の訂正記事の序に養賢寺堂宇調査に、會員平川さんのあっせんで、納所さんの長時間のお話とご案内に、門外不出の古記録をつぶさに拝見する事を得たので、此の際堂宇と、今迄間違つて伝えられていた伝承の氣づいた点をまとめて見た。

文政八年養賢寺出火、本堂庫裏焼失の記事などから大書院も含めて庫裏として答えたので、もっと適格な部分指示が良いから大書院と訂正した。

庫裏は勿論寺の厨房の意だが、広辞苑に、①寺の台所庫院 ②転じて住職や家族の居間「義経記云云」とあるように本堂と庫裏焼失で大まかに発表される場合もある。寺の案内板には「……本堂に続く閑静な大書院、大屋根のそそり立つ古風な庫裡(裏)……」と説明しているように高標公の額は、大書院と書いた方がわかりやすい。

養賢寺古事を書き残した「鼎山記」の當山の建造物には、養賢公之廟祠・一切経堂・本堂・庫裏・辯才天祠・靈牌堂・禅堂が記されている。

禅宗の七堂伽藍は、僧堂(雲堂・座禅堂)・法堂(住持説法の道場)・庫院(庫裡)・浴室・三門・東司(便所)・仏殿があげられている。(一般寺院の場合は多少異なるが畧)

養賢寺の場合は法堂と仏殿を一つにしている。

今これを明治三十六年の境内図<sup>注1</sup>に依つて見ると、

正面に、門番所(現在物置)・通用門と御入門・内部に入つて西から隠寮・浴室・中央に鐘堂・東に経蔵・その背後に西から薪部屋・東司・井戸・味噌部屋・宝蔵・東司・庫裡・東司・東司・大宝・東司・内玄閣・通用玄閣・東司・書院・本堂・恭敬堂(高政公像礼拝堂)・本堂

南東隅に御入玄闕・裏に宝藏・その右に願王殿・東の壁近くに地藏堂・裏門を出て水天宮・妙見堂と井戸・裏門内側から墓所入口の棟門、階段を昇りつめて右に薬医門内が毛利家墓所・門内に五輪塔の外、元祖公御靈廟（真捐館）と法雲院殿・御靈廟、外に出て更に西の山に昇ると三十三ヶ所靈場と金比羅堂があり、この道は城山北之出丸下からの捨曲輪と結ばれる。

裏門外の前記妙見堂から上に登ると寺世代の墓所を初め名士の墓所が松雲台まで続く。

秋月橋門先生一家の墓所を松雨台か松雲台かと問題にされるが、益田先生は「郷土佐伯の碑文」解説の中で松雲台とし、橋門先生記念碑設立趣旨の中には「……松雨台ニ建設セント欲ス……」とある。今度鼎山記を見ると「松雲禪閣 三十勝」の用語がある。これに関係して考えれば松雲台が正しいと思われる。

山すそまで下りて下の道を東に向うと、その端に松崎地藏尊に出て背後の山腹から山すそに広がる新墓に廻る道になる。

建物の推移に位置関係を併せて考えていただきたいと思えます。

藩祖高政公就封から四年目慶長九甲辰年毛利香華院として建立着手、慶長十年落成。山号龍鼎山の由来は「茶飲話」によると、竜護寺から採ったものらしく、当時竜護寺は一問四方の茅屋で住持もなく荒れはてていたものを、養賢寺に引き移す考えで龍鼎山と名づけたという。本尊千手千眼十一面観音（現竜護寺本尊）を移す事についてのは伝承はおもしろいが衆知の事で省畧。

開祖として豆州の人国師の印可を受け、師詔を承けて柴衣を賜い妙心寺に住するの時、公、師の禅室を参叩し、次で養賢入寺の約成って一祖として迎えられた。「佐伯に過ぎた養賢寺」と言われる基を名実共につくりあげられたわけである。

寺歴の中から堂宇の問題を考えて見ると、

五代高久公代 位牌堂（靈拝堂）天保四年（一六九一）辯才天堂・地藏堂・蓮池が七世東天和尚によって天保六年（一六九三）つくられた。

位牌堂は「明治三十六年図」では願王殿とある。願王殿は地藏堂であるが、これにまつわる話を納所さんから承ると、堂が火災にあった時、中村の熱心な信者がかっぎ出して祠ったのが今の松崎地藏尊だそうである。松崎

地蔵の御利益が灼である、今でも中村の人達には手厚くまつられている。

只不審は明治三十六年図の願王殿は地蔵堂とすると図中にもう一つの小さな地蔵堂が図示されている点をどう考えたらよいものか。焼ける以前の願王殿（地蔵堂）が建設され、本尊は松崎に移り、名前だけの願王殿が残り、別に地蔵堂が作られたものとしか考えられない。図示の地蔵堂の位置は、現在像の立っている六地蔵のあたりになる。地蔵信仰の対象となる地蔵と、六地蔵の六道の辻を考える死後の導きの為めの六地蔵尊とは、お詣りの気持の相違もあるだろう。図は六地蔵堂と記されて、建物も小さい。願王殿は現、霊拝堂に見る如く、宝形造りの大きいものである。どなたが解決を示して欲しい。

次に弁才天堂の問題であるが「三十六年図」にはないが、現在大師堂（佐伯四国一番札所）の所がその位置であると云われる。

大師堂の中には弁天像はない。今像は本堂にまつられているという。寺の守りとして大切に扱われる像である。

大師堂は、大正六年（一九一七）十一月佐藤一哉氏が佐伯四国を開く時第一番札所として、今の松崎地蔵の道

外に養賢寺持として造られたのであるが、終戦後民家になってしまつて、大師像は弁天堂にうつされる事になつた。

名称が大師堂になって御堂の役割が変わった。問題なのはこの建築である。天井画の北斗七星を囲む円の周囲に東西南北を表わす易経の算木が描かれている。

更に屋根を見ると、丸巴唐草瓦が十二（切妻造りであるが隅に下り棟様に丸瓦を二列宛計四列、端の丸瓦下端一枚分が三方に開いて、雨蓋瓦を置く構造のため四隅で十二個の丸巴唐草瓦が使われていた。この丸巴唐草瓦に算木の模様をつけているから、夫々の方位に併せて葺かれていたはずである。今五枚を欠ぎ、残りの使い方が全然方向を考えない使い方であるから、意味を知らない左官が出鱈目に使つたものだろう。

只算木の文様は、天井画の北斗七星からんで選択されたであろうから天井画の北斗七星と併せ考えて妙見堂のものと思像する。

妙見堂は「三十六年図」にある事を前に述べたが今はない。建築材だけが弁天堂に使われて残り、大師堂に変わつて来たと思像している。水天宮も今はない。妙見さま

の行方はわからない。

宝藏二棟は今、西の一棟のみで東はなくなつた。

恭敬堂は、藩祖高政公を礼拝する御堂として六代高慶公の時元禄十五年の建（鼎山記）。鶴藩畧史は十四年八月二十八日としてある。何れかは市が温故知新録を死蔵していて我々には見せてくれない今の段階では判定し難い。

一切経堂は目見格以上の者が夫々格式に依じて、月月講銀を差し出し、その銀子を貸し廻して延享元年から六ヶ年の歳月に貯蓄した金を藩に差し出して建設を許可された。寛延三年に完成（鼎山記は當山建物記に上記を、年表欄には寛延二年と記す。）何れか。

僧堂は明治四十四年五月工を起し、十二月に落成している。十三代高範公代二十世雪堂和尚の時である。

毛利家墓地の建物として高政公廟真・捐館は、宝永四年十一月六代高慶公の創建は周知の事であるが、破損の爲めその後十二代高謙公代慶応四年（明治元年のはず、四月改元）に改築九月上棟。

法雲院殿廟は「明治三十六年図」中に記されているが最近迄高政夫人の廟とされてきたのはどうした間違いか。

明治四年に毛利家の仏像・靈碑・仏器を鼎山にあつめたという記事の中に、久部村の御墓所・久成寺内の御墓総て鼎山に預けとなった時点で久部東禅寺の山に「城山の見える位置に埋葬すべし」とご遺言の地に（今跡に祠のみ残る）造られたお墓もこの際移された記事である。それが現高政廟前の廟である。

附 久成寺の五輪塔二基、今も同寺に祭られている事を高棟公葬儀の節初めて知つた。鼎山記とは異るが夫夫事情のある事だろう。

法雲院廟は御母堂の諡名であるし、小五輪塔ではあるが記名に、「元光良月尼」宝永四年三月四日とある。

これに「當城御先祖御位牌之記」養賢寺蔵の中に探して見ると、寛永四丁卯三月四日、毛利伊勢守高政公母上杉謙信孫「法雲院殿元光良月尼大師」とある。尚並んで書かれている「善教寺御位牌写 法雲院殿釋妙西尼公正定聚位」とあり、御母堂の五輪塔である事は間違いない。「明治三十六年図」入手の八年前より主張し続けているのに徹底しない。

妙西尼公の御位牌は、現在でも善教寺にまつられている。高政公夫人のお墓は、東京東禅寺墓地に公の墓と並

んで建てられている。

以上堂宇の問題だけとりあげたが、建築構造と寺室の問題を何れの機会かにとりあげて見たい。

注1 「佐伯町臨齋宗妙心寺派龍鼎山養賢禅寺境内全

図」明治三十六年十月、養賢第十九世天慧謹識氏は養賢寺住職歴四十五年とある。

尚、この図中には高政公の略歴及開祖三関和尚の記もある。

1. 「鼎山記」佐藤鶴谷・養賢寺蔵
2. 「當城御先祖御位牌之記」・養賢寺蔵
3. 「龍鼎山養賢寺古事録」片岡省念老師
4. 「鶴藩略史」
5. 「佐伯志」佐藤鶴谷
6. 「佐伯秘説録」 同右
7. 「佐伯市史」

語字訂正 一三九号

×

○

十八頁 本文一行目 養賢寺庫裏 ↓ 養賢寺大書院

序に同右の高標公書額について佐伯市史七二九頁の寫真は大書院のそれとは違い二年前の書であるが、現在養賢寺に見つからない。

## 原稿のお願い

『佐伯史談』は申すまでもなく私達会員の機関誌です。決して専門の學術誌ではなく、泥くさい素人の雜誌です。どなたもご遠慮なく原稿を送って下さい。

人の住む所には必ず歴史が埋もれています。浦々には○。新地があり、在方には○。新田があります。これは開拓の歴史でしょう。道端にポツンと立ってござるお地蔵様は、一体誰が建て、どんないわれがあるのでしょうか。すたれつつある庵の歴史は、村々に語りつがれている話は今調べておかないと、古老の方が亡くなればわからなくなる事はありませんか。

易から入って村の歴史を掘り起こそうではありませんか。一応次号の〆切日はありますが、原稿はいつ送って下さっても結構です。文の上手下手は問いません。どうかご遠慮なくご寄稿下さい。